

日本で初めて
再審で無罪になった死刑囚・免田榮事件



中村登紀夫 (TBS WOWOW)

みんがひ
録ろう
民放史

題字 中川 順

今年(2014年)2月14日、大雪の東京でしたが、免田榮さんが大牟田から会いに来てくれました。昭和35年、ラジオ東京の『目撃者の記録・ある死刑囚の手紙』の取材の際、福岡刑務所で面会して以来54年ぶりでした。免田事件の取材記録については後述します。

その後、免田さんから「獄中で習い、点訳奉仕をしています。何かいい本を送ってほしい」と手紙があり、2年くらい何回か本を送りました。それが何年ころか記憶がないが、免田さんが「心の師」と仰ぐ牧師の教誨師・潮谷総一郎さんの著書によれば昭和35年の冬からとあるので、その2年ほど後だと思う。

点訳本は、潮谷さんが運営する福祉施設の一環である「熊本ライトハウス」の目の不自由な子供たちに贈られ『免田文庫』と呼ばれました。リストのなかの『次郎物語』『氷点』などは私も送った記憶があります。

そのころ吉田石松の再審が大きく動き始めて、私はそちらの取材に忙殺され、38年、石松無罪判決後、身辺の変化、人事異動と続き、いつの間にか免田さんとの連絡も途絶えて、無罪判決の時もお祝いの言葉すらかける術もなかった。

それが、TBSの『報道特集』が免田さんを取材しているのを知り、昨春秋、本人に手紙を届けてもらったのです。暮に突然の電話、相手の番号を見た家内が、「これ九州よ、もしかして大牟田か、「もしもし、中村さん。津田騰三さん、知ってますよねえ」、「免田さん！ 会いたいよ」、津田さんとは免田事件の弁護士。「オレ、大牟田行きたいけど、脑梗塞やつたんで行かない」、「私が東京に行きますよ」…大雪の日、免田夫妻が会いに来てくれたのです。確か米寿になる免田さんは、そうとは思えぬほど元気でした。

刑務所でも花を植えて、看守や囚人の人たちにもあげていて、今も庭には花いっぱい聞いていたので、ささやかですが、陶芸教室で造った一輪挿を差し上げました。

(以下、敬称略)

『目撃者の記録』を 最後の法廷にしたい

昭和35年8月1日スタートした『目撃者の記録』はラジオ東京が初めてゴールデンに編成した報道番組。30分の録音構成を担当二人で2週間に1本制作、よく出来たなと思う。企画段階で番組の柱の一つにしたのが冤罪事件だ。そのころ米国の推理作家ガードナーの『最後の法廷』が本屋に並んだ。好きな作家だ。小説ではなく主に黒人に対する不当な判決を実際に覆してゆく記録である。これだ。番組を『最後の法廷』にしたい。

よくも図々しい企画書を書いたもんだ。弁護士二百人ほどに手紙を出して扱っている事件を教えてください。

第一回が吉田石松の『俺は無罪だ』。次が青梅事件の『雪の朝のアリバイ』。そして第五回が免田事件の『ある死刑囚の手紙』だ。

ネタ元は昭和34年7月、雑誌に『アリバイのある死刑囚』を書いて初めて免田事件を世に問うた津田騰三弁護士だった。

免田事件は昭和31年、熊本地裁八代支部の西辻幸吉裁判長が再審

決定をしている。どのような経過で死刑囚の再審が決定されたのか。

昭和27年に免田はキリスト教の洗礼を受けている。いつ神に召されるかも知れない身で聖書に心の救いを求めたのだろうか。

その彼の訴えに応えたのが前述の潮谷牧師だ。

免田が無罪を訴えても、はじめ、司法が正しいのは当たり前と思っていたが、事件の当夜、その翌日にもアリバイがあると真剣に訴える免田の言葉に動かされ、一番の弁護士に会うと：免田さんは真犯人ではありません。裁判では敗れたが私は信じています。判決の証拠は自供書だけです。裁判調書を調べ、アリバイ証人を探し出すなど再審の証拠を整えて決定に導いた。キリスト者として、福祉施設を運営しているだけのズブの素人が成し遂げたのである。



潮谷さん(左)と免田さん

しかし、この決定は昭和34年4月、福岡高裁で取り消され、12月には最高裁も特別抗告を棄却した。潮谷総一郎は免田榮救援会会長として再度の再審へ精力的な活動を続ける。

免田の強い希望で弁護士団に加わった津田騰三と会う：確定死刑囚再審無罪の前例はありません。でも望はあります。西辻決定がありますから：。

免田事件を取材したとき、私はこの方のことを知らず、お会いすることがなかった。

この再審決定書謄本を津田さんから頂いた。実に見事に、論理的に免田のアリバイを証明している。

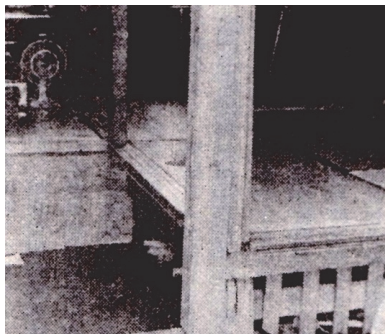
この決定に従って取材をしよう。すぐに刑務所の免田榮に宛てて無罪の証拠、死刑囚の日常、心境などなど書いてほしいと手紙を出した。免田からは何通かの手紙をもらった。日々死と向き合う日常が綴られている。

番組タイトルは最初『アリバイのある死刑囚』としたが、最高裁事務局から「係争中の事件を取り上げるのは好ましくない。放送をやめてくれ」とクレームがあった。デスクから取材先に連絡があり、

「放送をやめるなんてバカな話は拒否したが、先のこともあるし、タイトルだけ変えてくれ」。

免田事件とは、番組で振り返る

免田が、その罪に問われた事件があったのは昭和23年の暮の12月29日のこと。球磨川を遡った熊本県人吉で、この夜、祈祷師夫妻が殺され、同じ部屋に寝ていた娘二人も重傷。凶器は鉋と推定される。



殺人事件現場
(熊本日日新聞・昭和23年12月31日)

腹違いの息子二人の部屋は現場とは離れており、兄は寝入っていて気づかず、夜警に出ていた弟が妹の叫び声で発見した。その年も後2日で明けるという暮の29日に



免田さんが描いた
連行の図

取り調べに対し、免田は、自分

起こった平和な温泉郷の惨劇は、早くも翌朝には人びとが知る事になった。

年が明けた1月12日、聞き込みにより免田榮が容疑者として逮捕された。

免田は当時24歳。人吉に近い免田町の農家の倅で、事件の直前妻と別れ、山仕事をしたいと事件当日家を出たまま、知り合いの家など方々を泊まり歩いてた。

免田が逮捕された時に泊まっていた家の主婦は、そのときの模様を、刑事さんが5人来て、「免田ちゆうがおるじやろ」、「はい私です。

何か事件が起きたとですか」、刑事さんが「さあ話せ、白状せ、いろいろと1時間も詰問し、白状せな連れてく云うても、なーんも言わなかった」。刑事が来たとき慌てて隠れるとか逃げるとかはなかったとも言う。

は関係ないと言いつ張ったが、逮捕されて6日目になって犯行を自供しはじめた。以後、現場検証でも、裁判でも、地裁の第二回公判まで自供は変わらなかったが、第三回公判で、自分はアリバイがある、自供は刑事の拷問によるものだと犯行を否認した。しかし、最後の最高裁でもアリバイの主張は通らず、昭和26年12月、死刑は確定した。

新旧刑事訴訟法交錯時の混乱 自白だけの証拠

では、どんな証拠があつて免田は犯人とされたのか、第一審担当の野田検事(本人の自白もあつたし、凶器と解剖結果、現場検証の結果などが自白を裏付けており、有罪判決には充分な証拠があつた。確かにこれで殺した、凶器として押収された銃と被害者の血液型が一致するというような、直接的な物的証拠は得られなかったが)。

対して、事件を担当した刑事は(「新刑事訴訟法で以前の捜査とは違い、当局はかなり追われていたのではない。現場検証の写真もかなり不備だと弁護士に言われた。

アリバイの裏付けも足りなかったと私の気持ちとしては思う。色々手落ちがあつたとしても、これさえあればという証拠があつたかと思われれば、確信はないですね。なんとか落としたくて、タバコの火くらい押し付けたですね」。

結局、物証は何もなかった。

『目撃者の記録』の放送は、それから9年の歳月が流れている。



死刑囚・藤崎拘置所支所で

獄中からの免田の手紙は切々と無実を訴えている：

「真夏の暑さ、いよいよまして参りました。先日は突然お便りをくださいまして心よりお礼を申し上げます。さて私が犯人でない無実なる証拠を述べたいと思います。私には事件のアリバイがありません。

あの日、そんなことが起きるとは全然知らぬ私は、山仕事にゆくために当日の夕方実家を出て、人吉に出て、市内、駒井田町の丸駒

というところに泊まっております。証拠には、主人の手帳、及び証人文字があります」。

だが、津田さんの話では、アリバイ証人の文字は、その後身体をこわして特飲店を辞め、住所不明だった。

事件は12月29日、3日後は新年、アリバイの日を特定するのは容易な筈だが、文字は、検察が30日だろうと言うと、そうかな。弁護士から29日だろうと言われると、そうかもと、証言がくるくる変わる。特殊飲食店の女性だ。捜査当局に弱いのも想像できる。

ならばまず、29日より30日のアリバイを取材する方が確実だ。

12月30日はどこに泊まったか

手紙は続く。

「翌30日には丸駒を出て、10時の汽車で那良口の兼田又市さん方に行つています。30日の証人は兼田夫妻。その日、兼田さんは駅前の米屋に米の配給をとりに行つていて、その帰り道に私と一緒にたつて、その日は兼田方に泊まっております」

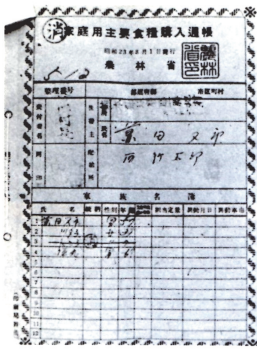
市役所で調べた兼田又市の家は

那良口の駅から3里の山奥にある。

兼田の証言はこうだ：那良口駅前に米の配給を取りに行き、もち米も買った。帰りに橋の欄干に腰をかけて休んでいた。そこに免田が来て山に仕事がないかという。あると答え、その日は、私の家に泊まった。帰りに大将にあつたのもその日だけ。12月30日だ。

幸い、米の配給所はまだ駅前にあり、その上帳簿も残っていた。

：12月23日、兼田又市、米14キロ他に豆と芋。12月30日、兼田又市、もち米3キロ、米4キロ：12月中に兼田が米を取りに行ったのはこの2日だけで、米を取りに行くのは又市の仕事だった。



日付が記載されている米屋の台帳

細君も「餅をついた日から数え、榮さんが泊まったのは30日です」。

張り出しがあつた前の晩
あの男は来た・丸駒主人

免田の相方だった文子の居所はまだ分らないが、抱え主だった丸駒の主人佐伯の証言を録った。

「餅をついた朝ですね。張り出しがあつて見に行きました。その前の晩にあの男が来た、それしか分からないですね。殺人事件の張り出しは30日だから、泊まったのは29日、だから日にちはそこになるわけですね」。



事件を伝える熊本日日新聞
(昭和23年12月31日)

事件の張り出しとは、新聞社が街に張り出した速報に違いない。西日本新聞の木下元人吉支局長を訪ねた(事件は30日午前4時頃知った。こんな大事件は人吉には滅多にない。この日早朝、駅前や目ぬき通りに事件速報のポスターを貼った。駅前丸駒から20メートルほどだ)。

29日のアリバイも確かなようだ。だが、事件の晩を免田と過ごした文子の証言は、どうしても欲しい。丸駒の主人から小倉あたりにいるらしいと聞いた。

ころころ変わった文子の証言

人吉では祈禱師の長男、八代で次男、唐津で重傷を負った次女にも話を聞いたが、いずれも事件の核心に迫るものではなかった。

小倉市役所で文子の住所を調べた。結婚でもして姓が変わっていたら万事休すだ。が、ついていた。

住所を教えたタクシীর運転手が車を止めて「この上です」。坂道を登ったところの小さな、しかし小奇麗な家だ。玄関で来意を告げる。結婚したのか分からないが男の人と一緒に住んでいる、子供もいた。聞きたいのは特飲食店の時の相方の話だ。そんな状況で話をしてくれるだろうか不安がよぎる。だが、すんなりと座敷に通してくれたと思うと、デンスケを見た男の人は、「ちよつと出てきます」と子供を連れて外出してしまつた。用件は分かっているのだ。女の話は聞きたくないのか、あるいは、

話しやすいよう席を外してくれたのか。この暑いのに。

いよいよこの取材で最大の山場、事件の夜、相方として免田と一夜を過ごした女性の証言だ。

「正月過ぎて何日目に警察から呼び出しがあつたんです。それで、その男知ってるか、覚えあるかと聞くもんですからね、じい一つと考えて、そういえば正月前にね、来られた、知っております。いつの日だった。29日かな30日だったか、日にちがこんがらかっていませんかねえ。」

そしたら八代の裁判所から呼び出しがあつて、検事さんですかね、この日やつたろう、この日やつただろうって、頭がこんがらかって迷つとつたです。そしたら、この日やつたと免田も言つたというですよ。そんなら私もそうだったかなあつて、そうですと言つたんですよ。

だが、日にちを確定する確かな出来事があつた。

朝、警察の車が汽笛を鳴らして

「夜の9時に人吉に汽車がくるんです。汽車が来た時に免田さん

が来たことはよく覚えていゐるんです。夜9時だからおカネなんぼだつて、そのときすぐおカネ頂きました。

朝起きて免田さんが帰るのと警察のオートバイの、今で言う白バイですかね、うんうん汽笛鳴らすのと一緒でした。殺人事件があつたですね。

アナ「汽笛つてパトカーのサイレンですね」

警察の車がうんうん鳴らして、何の汽笛かつて聞いたら、今、信者さんの家で二人殺されて警察の車が走つて、事件があつたところ見に行かんかと誘われたんです。これこそ日にち確定の決定的な証拠だが、文子が、それを法定で証言したのか、または無視されたのか、それはわからない。

文子が話終わったタイミングを計ったかのように男の人が帰つてきた。暑いからとアイスクリームを買つてきてくれた。嬉しかった。文子は、いい人と一緒だな。この事件の取材で一番好感を持った男の人だった。

福岡に戻つて津田弁護士と合流、刑務所で死刑囚免田榮と面接した。吉田石松とは違ひおとなしい印象

だった。

津田さんに、文子も見つけたと話す、「よく見つけたなあ」。

死に向かい合う日々

《私どもの日常生活は3畳の部屋に小さな机があり、上には高窓があります。表は分厚い扉があり、大きな錠が嵌めてあり、一度部屋に入ると特別な用事がない限り開きません。

私はカナリアを飼つておりますので唯一の相手です。



免田とカナリア

毎年2月より3月、そして5月より6月、11月より12月は一審気を遣う月です。処刑が行われる月だからです。

そして特に内閣改造の声が獄中に聞こえると嫌な日が続きます。処刑のある時ならば、二、三日前からわかります。誰も教えるものはないのですが、長いこと生活をしておりまゝと勘で分かるのです。

私も40人ばかりの人と別れの挨拶を交わしていますが、一人一人の思い出が、そして手の感触が今も残っています。

処刑のある日ほど嫌な日はありません。まず、私どもの世話をする役人さんたちの態度が変わります。

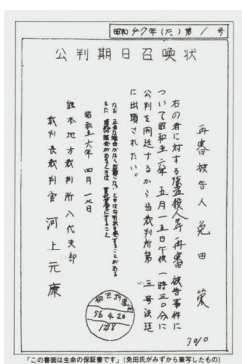
立場は違つても感じることは同じなんでしょうか。ときが来ると、数十名の職員が連れ出しに見えるのです。連れ出されるものよりも、見送る者の方がたまらないのです。昭和38年2月28日、吉田石松に無罪判決。この裁判の主任弁護人だった後藤信夫さんが、日本弁護士連合会免田事件特別委員会委員長になった。

後藤さんとは昭和35年、私が石松のアリバイ証人を探して以来、無罪までの3年間、その後も亡くなるまで親しくしていただいた。この年の暮れ、後藤さんは免田に会つて「君だけの問題ではない、

国家の問題だ」と免田を励ました。だが、昭和42年、五回目の再審請求も最高裁で却下された。

第六回の再審請求に際し、アリバイ証人の文子が宮崎に移り住んでいるのを突き止めたのは元検事の安倍治夫弁護士だ。安倍さんは、検事でありながら吉田石松の再審の理論構築をした人で、昭和38年に、免田を《もう一人の巖窟王》と呼んでいる。

昭和56年4月20日、福岡刑務所に通知が届く。再審被告人免田榮に対する(公判召喚状)である。六回目の再審請求が、ついに認められた。今度は日弁連の人権擁護委員会が総力を挙げています。今度こそ、免田は歓びに溢れる手で、これを筆写した。



公判期日召喚状

昭和58年7月15日、無罪判決。日本で初めて死刑囚が再審で無罪になった。免田に無罪判決を下した川上元

康裁判長は、朝日新聞『人生の贈りもの』で、免田のアリバイについて、「西辻決定」があつたから、「あれはすごいですよ」と語る。免田の無罪は「灰色無罪ではない全く間違つた、我われの先輩が間違つた」と。

吉田石松無罪のときの小林登一裁判長も「ここに、我われの先輩が翁に対して犯した過誤を深く謝罪する」と判決で結んでいる。



無罪判決

すべての裁判官がこう語る日がいつくるだろうか。

幸運な男ですよ

免田さんは刑務所の中で思いもかけず焼酎を手に入れ、何年ぶりの焼酎は最高の味だったと回想している。「免田さんおかわりは、

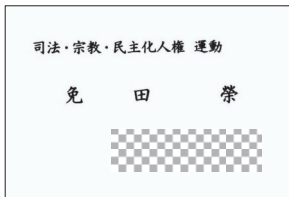
焼酎もあるよ」、「ビールでいいですよ」。「私、カナリア飼っていたでしょう。カナリアは窓から外に出られるんですよ。でも必ず帰ってくる、可愛かったですネ。和やかな雰囲気が続いた。

刑務所の役人たちは、天皇から拝命されたんだと、陛下を笠に着て囚人の言葉など聞かない。

作家の半藤一利は言う(戦後、天皇の軍隊は解体されたが、困民の官僚ではない、天皇の官僚は残った)。



免田さんは今、冤罪事件の援助、死刑廃止運動など活動して



自らの体験から死刑廃止を訴える

第1回死刑廃止世界会議(2001年)と免田さんの名刺

いる。

フランスやアメリカにも呼ばれたその体験を語っているが、死刑囚34年という、世界でも珍しい、牢獄の日々は南アのマンデラさんより長いと満場拍手だったという。

窓外を見ると雪がいよいよ激しくなってきた。

免田さんが突然口にした、「私は幸運だった」：一瞬、耳を疑う。死刑から無罪に、再び人間社会

に戻ってきた。妻も娶った。別れのあいさつをした死刑囚は百数十人、冤罪を晴らすことも叶わず逝った人もいるだろう。比べれば確かに「運が良かった」かも知れない。西辻、川上二人の裁判長にも恵まれた。特に、この人がいたらこそという潮谷総一郎さんもいた。

しかし、明日をも知れぬ死刑囚として34年。その人が今(私は運が良かった)と言う。これほど悲しい言葉があるだろうか。本来は燦々と輝く太陽の下で暮らす日々であつた34年の人生、その人生を奪った国家は、この言葉に何を思うべきか。

免田榮《無罪》の判決を法廷で聞き、自身も瀕死の重傷を負わさ

れた祈禱師の次女は、「じゃあ、真犯人は誰なの」。

答えは永久にない。

冤罪は国家による犯罪である。

完全無罪の免田さんですら、今も人びとの目が冷たく、故郷の免田町に帰れることがない。

冤罪は、無罪になった人の人生を奪い続けるだけではない、被害者の人生にも、再び深い傷を負わせる。



免田榮さん夫妻(2014.2.14)

資料提供 免田榮 熊本放送
熊本日日新聞 中村登記夫